長野工業高等専門学校紀要第 57（2023）1-15

臨安の「国城」（京城）をめぐって
― 都城史への位置づけのために―

久　保　田　和　男*

Exploring the "Guocheng" of Lin'an
Understanding its Place in the History of Imperial Capitals

KUBOTA Kazuo

Considering the absence of outer walls to defend the urban center of Lin'an: A comparative historical analysis. Firstly, the exiled Southern Song dynasty intentionally did not develop Lin'an as a complete capital city, despite it being the imperial court. One point of discussion is the lack of an outer defensive wall even as the population of the city grew. This can be linked to the conflict between the New and Old Law factions during the Northern Song dynasty, and their relationship with city walls and suburban shrines. The early Southern Song government took the position of the Old Law faction, as demonstrated by their support of Empress Yuan You, and may have been unable to rebuild the grand Kaifeng outer city, which was a symbol of the New Law faction. Moreover, in the context of ceremonial rites, the Nanjiao ceremonies in Lin'an were held during the reigns of Gaozong, which were not the Tian Di Fen Ji (Separate Worship of Heaven and Earth) but the earlier Tian Di He Ji (Joint Worship of Heaven and Earth), and the construction of the Earth Altar (Fang Qiu) did not take place. These points were explored in-depth by comparing them to the construction of the central capital(Zhongdu) by the Hailing King, who aimed to unify China.

キーワード：臨安　国城　京城　賈似道　孝宗　高宗　中京　海陵王　開封　郊祀

はじめに

中国の都城に関して、上から見た城壁のライン（平面プラン）は常に注目されてきた。しかしながら、水平すなわち地上からの視点から見た城壁の高さや、城壁の防衛機能、都城社会との関係などについては余り検討されていない。例えば、唐の長安では内城（皇城）の方が高く、宋の開封では外城（新城）の方が高かった。この違いは外城に住む民衆と皇帝との距離感の違いであり、都城空間のあり方の変化を示しているようだ。宋朝に見える「与民同楽」の理念の反映と考えるのである[1)]。それは、唐宋変革論における都城の変化として位置付けることが可能にも思える。このような観点を出発点として、政策や国家形態の変化が、都城空間にどのような影響を与えたのかを考える方法によって比較都城史を組み立ててきた。その研究構想の一環をなす本稿は特に開封と臨安という両宋都城の城壁を比較することによって臨安を考える。

臨安は行在として知られているように臨時の都城である。城郭の平面プランは都城となる以前に設けられていた北宋の州城をそのまま用いている。杭州府衙の範囲の皇城とし州城城壁を京城と称した。そこには直線により示すことが可能な幾何学的な多重城郭プランは見あたらない。上記のような複数の理由から、隋唐長安城を代表とする中国都城史の潮流の中に位置付けることは躊躇されてきた。

しかし、行在という位置づけではあっても臨安は首都としての機能は果たしていた。高橋弘臣氏の労作〔高橋 2012〕は、北宋から南宋に至る臨安の空間

＊ リベラルアーツ教育院　教授
原稿受付　2023 年 5 月 20 日

変容を詳細に検討する研究である。高橋氏は都城史の視点から、杭州が臨安として都城機能を獲得することで、どのように変容したのかを考察する。礼制施設や皇族の住居、禁軍軍営、諸官庁などの配置が臨安の地図上に指し示される。

本稿は高橋氏の研究に導かれつつ、氏が検討しなかった城壁の高さや内外という問題について検討したい。例えば、中国都城には国家儀礼である南郊の舞台として儀礼機能が整備される。これが州県城などの地方都市との違いである。臨安でもやはり城郭の外側に郊壇が整備されそのほかに儀礼に用いられる諸施設が整備されている[2]。そのため臨安「京城」は「国城」と称せられた[3]。「国城」は周の資料にも現れる都城の城壁を表す言葉である[4]。礼制上の都城の範囲を表す言葉である。臨安は、中国都城の伝統を受け継いでいるのである。

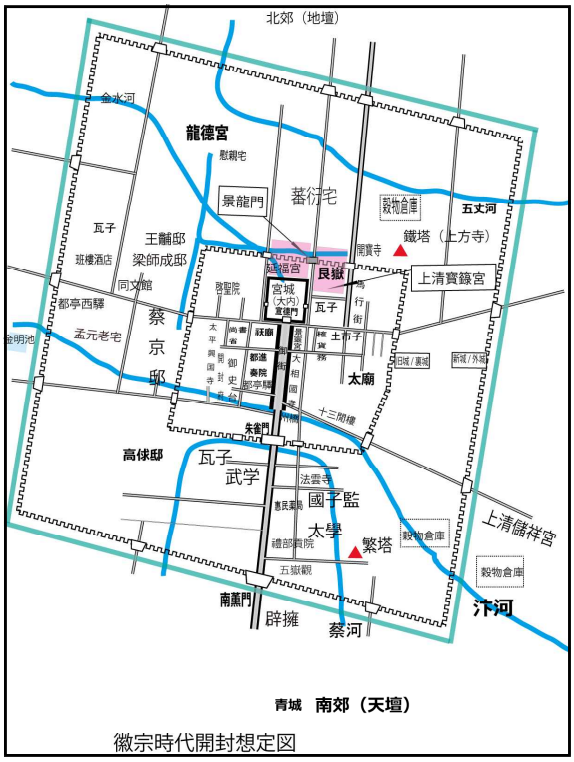
本論は臨安の城壁の諸問題を中心に、北宋開封から受け継いでいる側面や受け継がなかった側面などを考える。このような比較都城史の方法を用いて考えることにより臨安の独特な城郭構造に解釈を加える。この検討を通じて中国都城史の系譜の上に、南宋臨安を位置づけることを試みたい。

1. 臨安の国城について

複数の城壁で囲繞されている「都城」では、どの城壁を礼制上の都城内外の境界＝「国城」とみなしていたのかという問題を考えなければならない[5]。「国城」問題において唐宋間に変化があったことが近年明らかにされた[6]。隋代までは内側の城壁が「国城」であったが、唐代のある時期から外郭城が「国城」となったという。本稿ではこの研究成果に依拠しつつ、臨安の「国城」を巡る問題をそれ以前の都城の「国城」との関連において考えてみたい。

a 、臨安以前の外城郭と国城

隋唐の長安城は『周礼』の思想に基づいた都城であった。それは北周が周制を全面的に取り入れることによって国家としての正当性を保持しようとしたため、都城長安が『周礼』思想によって改造されたことが出発点となったとされている[7]。『周礼』の宮城プランの特徴は三朝制である。外朝・中朝・内朝に区画された空間によって構成される宮城である。外朝の部分、すなわち官庁街を取り囲む皇城が隋の大興城建設に際して設けられたことは都城史上の大きな転換点となったといえる。隋では郊祀施設などはこの「国城」（＝皇城）から某里という形で都城との距離が表現された[8]。また、「考工記」の「右祖左社」も皇城の構造として表現されている。



徽宗時代開封想定図

そもそも隋大興城の段階では外郭城（羅城）は建設されていなかった[9]。皇城が「国城」をになうことになるのは自然である。唐代において外郭城は、3代目高宗時代に建設が着手されたが[10]、完成したのは玄宗開元年間である[11]。この高さは 5.4m ほどであったが、防衛上の役割は余りなかったとされている[12]。実際、外郭城を用いての戦闘は行われたことはほとんどなく[13]、安史の乱以降、頻繁に唐朝の皇帝たちは反乱軍の接近に際し少数の関係者とともに逃亡している。

北朝隋唐などの都城では、外郭城は内城に比べて整備されていない。都城の各坊には多様な住民が集団ごとに居住し、都城の中心からの距離は政権からの距離を表していたといわれている[14]。内城の城壁が整備され、都城攻防戦が有ったとしても戦闘は内城壁を巡ってのものだった[15]。したがって、政府や支配者階級を守るための戦闘となるのである。

中国都城の外郭城に本格的な防衛上の役割が与えられたのは、実に後周の開封新城（外城）が最初である。のちに旧城（裏城）とよばれる城壁が後周建国当初の開封のもっとも外側の城壁であり「国城」であった[16]。ただし禁軍改革や統一政策の成功により、軍営や官庁そして民居の用地が不足するようになったため国城の外側に新城が建設された。あらかじめ坊城制による区画を定め、その後から住民が住

み着いた隋唐都城とは異なり、都城住民の集住が先である。それを都城の中に取り囲むために建設されたのである。都城住民の多くは、軍営に居住する禁軍の軍人・その家族であった。五代における傭兵制と禁軍の発展が都城住民の構成に大きな影響を与えたのである[17]。この外城壁は版築で作られたが、特別に虎牢関付近のアルカリ性の成分を含まない粘土を運んで作った堅固なものであった[18]。宋代では国初より「国城」と称される城壁は、新城（外城）となる[19]。

宋初の開封の城郭は後周のものそのままである。新城も唐代に作られた旧城も共に版築の城壁であり、メンテナンスが常に必要である。北宋の史料によると新城の修築は頻繁に計画され、そして実施されたことがわかる。

新法時代には、新城はほぼ新築ともいえるような大規模な改修が行われた。城門はすべて甕城をもった甕門とされた。城壕も拡幅されている。この新城・城濠は金との攻防戦（靖康の変）において最前線となった。欽宗は都城住民とともに籠城する。そこが唐朝とは異なる。靖康元年（1126）の正月には、一度は金軍を撃退している。新城が最終防衛線であったようで、その年の 12 月に発生した再度の防衛戦において、新城が占拠されると、内側の旧城では戦闘を行わず降伏に至っている。旧城は修築を行われず、大内の拡張もあってその防衛機能を失っていたのである。

五代後周の城壁は禁軍軍営という政府機関を包括することが新城の主要な機能だったから、そこが防衛上の最前線となった。新法期には在京の禁軍軍額を中心に部隊の整備が行われた。欠員が多い禁軍部隊（指揮）の廃併を断行した。それによって在京禁軍の指揮数が減少し軍営用地も縮小したのである。その一方で新法政権は新城壁の大改修、城濠の拡張、甕城・馬面・女墻などの整備を行った。それはどうしてなのだろうか。この問題について次に考えてみたい。

まず慶暦時代、契丹の南下が考えられる中で范仲淹は京城の大規模修築を提案し、反対する宰相呂夷簡との論争に発展した。彼の戦略は「堅壁清野」というもので、都城住民だけではなく農村人口も城郭都市に避難させ、農村を「清野」すなわち空白地帯としてしまう。そして春になるまで契丹軍の退却を待つというものであった。遊牧民族の侵略に対し皇帝や支配者階級（士人）だけを守るのではなく、庶民まで守ろうとしたと言える。いわゆる范仲淹の「先憂後楽」の思想と通底するものである[20]。さらに、王安石の信念は「一民の生、天下に重し」[21]といわれる。つまり庶民の生命・生活を第一に考える宋代士大夫の思想が城郭に反映されたのが新法時代の城郭建設だったのではないか。靖康の変に際し実施されたのも「清野」という作戦であった[22]。唐朝の皇帝蒙塵とは異なる。

b、臨安の京城（国城）について

臨安の場合は、北宋時代の州城をもって京城（「国城」）とした[23]。次の史料は「郊外」での儀礼の施設（壇）を設ける際、「国城」がその基準となっていることを示す史料である。

・（紹興 18 年）六月十八日、詔：臨安府、於國城之東、擇桑（ママ）埣地、建築九宮貴神壇壝。・孝宗皇帝紹興三十二年八月八日、禮部太常寺言：看詳酺祭事。欲依紹興祀令、虫蝗為災、則祭之。候得旨、本寺擇日、依儀祭告、其祭告之所、國城西北、無壇壝。乞於餘杭門外西北精進寺、設位行禮。所差祭告官、并合排辦事、并依常時祭告[24]。

『乾道臨安志』などによれば、「国城」は隋代の創建に係るものだという[25]。なお、紹興の和議が結ばれたのちに最初の郊祀が行われるが、その時期（紹興 13 年の頃）には、大内の南に城郭が存在しておらず、皇城・端門とされた門（麗正門）が錢塘江を行き交う船から望見される状況であった[26]。それでは「九重」といわれる皇居の厳粛を保つとはいえないので、東南部に城壁が増設され[27]、麗正門からのびた「圍墻大路」と交差する地点に利涉門が建設された。「圍墻大路」は文字通り、皇帝鹵簿が南郊大礼において通過する御街なのであろうが、開封のそれに比べると短小である。利涉門に嘉会門という雅名が与えられたのが、紹興 28 年（1158）のことであった[28]。南宋臨安ではこの部分の城壁を「**新城**」と呼んでいる[29]。北宋以来の部分は「**旧城**」と称される[30]。

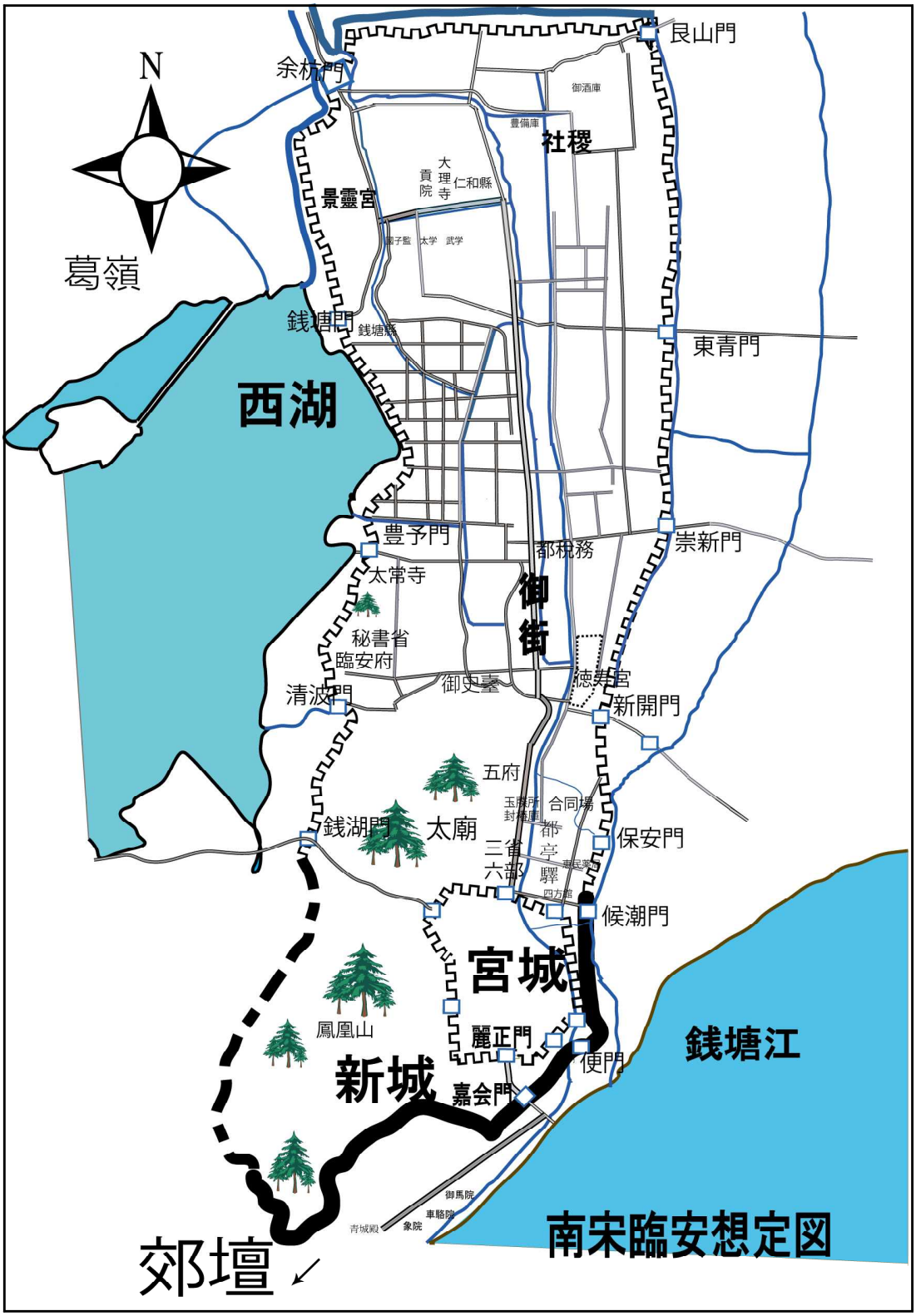
『咸淳臨安志』の郊廟には[31]、郊丘以下、郊外に設置された国家祭祀の施設が列挙されている。

・郊丘、在嘉會門外、南四里龍華寺西。
・藉田先農壇、嘉會門外南四里、玉津園之南。
・高禖壇、在嘉會門外南四里。中興初、寓祭於錢湖門外、恵照院齋宮。

これによると、嘉会門からの距離が示されており、この嘉会門が「国城」の正門として設定されたことがわかるのである（開封の南薫門に当たる）。

元豊の改修後の開封外城で用いられた城門の甕城の構造は、南宋臨安では便門、東青門と艮山門のみに用いられ、それ以外は一重の門だった[32]。城門の数もかなり多い。開封の 19 門（陸門 12 水門 7）に対し、臨安は 18 の門（陸門 13 水門 5）が城壁を穿っている。城壁の長さは、臨安（36 里＝ 20km[33]）に対して開封（50 里＝ 28km）である。

京城（国城）の城壁の高さや厚さについての史料は少ない。『夢粱録』によると高さは 3 丈（約 9.6m）、幅 1 丈（約 3.2m）ほどだったという[34]。現今の考古学者による残基の計測によると広さは大体 9 メートル[35]ということなので、「一丈余り」とは、頂上の部分のものと思われる。なお東南部に「新城」が作られたときの史料によると、やはり城壁の基底部



は2丈（約6.4m）であったという[36]。

南宋になってから作られた「新城」は、建造の際の材料リストに「用塼一千餘萬片」[37]とあり、磚城だった可能性が高い[38]。

従来の部分は**「旧城」**とよばれている。旧城が、大雨（春雨・梅雨）により崩れるという事態がしばしば記録されている。

> 隆興元年（1163）、十二月十八日、權発遣臨安府陳輝言う「本府は車駕駐蹕の地、その周回の禁城、春雨連綿たるによりて、**舊城**は多く圮（くず）れる。徳寿宮東より及錢湖門北におよび、景霊宮寺等に至る。計三百三十五丈たり。今年三月二十一日より興役し、十月二十七日に至りて畢んぬ[39]」と。

この史料では東側の徳寿宮から北に向かって西湖の沿岸に至る「旧城」が、断続的に延べ計1 kmほど崩れたことになっている。この10年後にも同様な史料があり、それによると同じ東部の城壁において72か所、計3 kmで崩壊（「損兌」）が見られたという[40]。

この前後においても城壁が崩れたという史料が頻出する。

・紹興2年（1132）・縁雨雪、摧倒過州城三百七十九丈（約1.1 km）。

・紹興12年（1142）・城壁剥蝕、日就摧毀。

・紹興31年（1161）・城壁摧倒 … 共一千八百丈（約5.4 km）。[41]

・隆興元年（1163）・周回禁城、因春雨連綿、舊城多圮 …（前掲）

・乾道9年（1173）・昨因今歳梅雨損兌、七十二處、計五百九十五丈（約3 km）。（前掲）

これらの史料で倒壊している城壁は、旧城の部分だったのであろう。南宋前期において、ほぼ、10年に一度は、数キロ単位で倒壊していることがわかる。最後の乾道9年の史料の下文には、「甎灰木植物料工食錢九萬五千餘貫」を用いて「自徳寿宮東、**修砌周回城壁**」したという。「修砌」とは、レンガや石を用いての土木工事を指す。徳寿宮より東の城壁について、行われた工事である。先に見たように「新城」は煉瓦造りとなっていたので、ここで、東側の城壁が3㎞ほど磚城となったことがわかる。

2006年に行われた考古発掘では、この徳寿宮付近の城墻が発見され調査された。報告によると、北宋時代の城壁の外側に南宋時代に加工を施されており、割石や煉瓦、そして材木を用いて崩壊を防ぐような構造となっていたことが判明している。とくに東側すなわち外側の壁面が強化されていたという。そのときに発見された、磚瓦は、理宗時代のものであった[42]。

隆興和議が結ばれた孝宗朝の前半、南宋は全盛期を迎えた。その時期に全部ではないにしろ、臨安京城の多くの部分が、磚城となったことがわかる。この問題については、後述してゆく諸問題についての論証を踏まえ、「おわりに」において私見を述べることにする。

元末（1358年（至正18年））、杭州は張士誠によって占拠され、元朝により修城が禁止されていたため崩壊していた城郭が再建された。平面プランには東側に拡幅し南側を縮小するという大きな変更が加えられ明清の城郭に受け継がれた。記録によると、城壁の高さは30尺＝約9.5mである。幅はそれに10尺をくえわえた40尺（約12.6m）であり、磚によって覆われた堅固なものだったという[43]。

ところで、高橋弘臣氏の指摘によると[44]、南宋成立以降、京城の東側に市街地が拡大していたという。張士誠は東側の市街地を城内に入れるように城郭を建設したのであろう。つぎに、南宋時代の城外の市街地と国城との関係を考えてみよう。

c、国城の外側に広がる市街地

臨安の人口は宋朝政府の南渡に前後して北方からの移住者が増加し従来の数倍に達したという[45]。住民の多くはこの「国城」の外側にも市街地を形成していた[46]。火災や盗賊に対する警備のため城内と同じく「廂」が設置されたのが紹興11年（1141）のことである。やがて人口増加に従って城外の廂は2廂から4廂に細分化されている[47]。

特に、行在となったことで禁軍（三衙）が多数駐留することになった。これは、宋朝が傭兵制をとったことに起因する現象であり、北宋開封でも同様である。開封でも少数は城外にあった[48]が、臨安の場合は城内は狭いことから、城門外に設置される軍営が多かった[49]。それを雄弁に物語るのが、城外にも軍人たち向けの娯楽施設（瓦子）が多数設置されていたことである。軍人以外の都人も利用することができたようだ。『夢粱録』には以下のように説明されている。

> 紹興の間、ここに駐蹕す。殿前司（きんぐんしれいかん）岩楊和王（楊存中）、軍士の多く西北人たるに因りて、ここをもって城内外にはじめて瓦舎を立つ。伎樂を招集し、以って軍卒の暇日の娯戯の地と為す。今貴家の子弟・郎君、これによりて

蕩遊破壊し、尤も汴都より甚しきなり。それ杭の瓦舎、城内外十有七處を下らず」[50]。（以下列挙される瓦子名を下表にまとめた。）

城内（５箇所） 南瓦子・中瓦子・大瓦子（上瓦子）・下瓦子（北瓦子）・蒲橋瓦子（東瓦子）
城外（１２箇所） 菜市瓦子・薦橋門瓦子・新門瓦子・小堰門瓦子・候潮門瓦子・便門瓦子・錢湖門瓦子・赤山瓦子・行春瓦子・北郭瓦子・米市橋瓦子・舊瓦子

これによると倍以上の瓦子が城外にあったことが分かる。網掛けにしてある二つの瓦市は、夢粱録の時点ではすでに廃されて民居になっているという。『咸淳臨安志』では、同じ瓦市名を列挙し、やはり、東瓦市は民居となっていたとするが、「錢湖門瓦子」は、「わずかに勾欄一所のみ存す」とある。したがって、『夢粱録』の瓦市記録が『咸淳臨安志』よりも後の記録であることが分かる。

実に、『武林旧事』や『西湖老人繁勝録』では、それぞれ 23[51]、25 という数字があげられている（後者は重複がある）。17 よりも多いのはなぜなのだろうか。『武林旧事』自序には、乾道・淳熙（12 世紀の後半）の記録であると明記されている。したがってこの数字は南宋中期の数である。1165 年金との隆興和議が締結され、在京禁軍も前線から帰還していたのであろう。瓦市における娯楽の需要も高まった最盛期なのである。

一方、咸淳年間（1265 － 74）には、モンゴル帝国の南進が本格化している。在京禁軍が派遣されて、臨安の禁軍が減少したことが知られている[52]。そのため娯楽の需要が逓減したしていった故なのであろう[53]。

『咸淳臨安志』所載の「浙江図」[54]には、東青門外に「瓦子」という文字が書き込まれており、『夢粱録』の記事と符合する。さらにこの図では東側の城壁と錢塘江との間の市街地が示されており、軍営と瓦子、寺観、菜市などが見える。城外における瓦子設置は開封にはない現象であり注目される。

周必大の記録では、

臨安の土人の諺に云く「東門は菜、西門は水、南門は柴、北門は米」と。蓋し東門は、絶えて民居無く、彌望（みわたすかぎり）皆な菜圃なりしならん。[55]

とある。「蓋」以下は、「土人諺」を受けての著者周必大の案文であろう。土人すなわち杭州の原住民たちの口碑によると、以前から東門外は野菜畑が広がっていた。周必大はそれを受けて、東門外に居民が居なかったと推測する。しかし、南渡後には、東門（東青門）外には軍営や瓦子が建設され、市街地化していたのである。

「市」については『武林旧事』に列挙されているものを以下の表にまとめてみた[56]。城内外におけるマーケットを比べてみると、むしろ城外の方に生活必需品のマーケットがあったことがわかる。市制が行われていた長安はむろんのこと、北宋開封にも見られない現象である。

城内（9 箇所） 薬市　花市　珠子市　肉市　北猪行 花団　青果団　柑子団　書房
城外（8 箇所） 米市（北関門外）菜市（新門外） 鮮魚行（候潮門外）　魚行（北関門外） 南猪行（候潮門外）布市（便門外） 蟹行（新門外）　羹団（便門外）

なお、斯波義信氏の著書付図には、宋代の「市、坊、団、行、作」の城内外における位置が示されている[57]。これによると、87 箇所のうち 41 箇所が城外である。半数近くの商業団体や施設が城壁の外にあったことは、やはり臨安国城城壁が市街地の範囲を囲繞するものではなかったことが判明する。

開封では、外城の外側に幅 30 mに及ぶ城壕が新法時代に開鑿されており、敵軍の城壁への接近を阻むはずであった。ただし、靖康元年の厳冬により城壕が凍結してしまい、首都陥落の要因となった。一方の臨安の城壕は、四周全体に及んでおらず、東側のそれは、『淳祐臨安志』では「菜市河」と称されており[58]、運河としての性格が強かった[59]。現在臨安市内に東河という運河がある。これが、南宋臨安の城壕の遺構である。運河とは、人々の交通のためのものである。したがって城外の空間と城内の空間を隔離する「防御施設」ではなく、むしろ一体性をもたらすものだったと思われる。先述したように元末、張士誠は、東側の城壁を南宋の位置から、約 700 メートルほど東に移す（現在の貼沙河の西岸）。これは、宋元時代を通じ南宋東壁城外の市街化が進行し、城内外の一体化が進行していたために、平面プランを変更する必要があったことを雄弁に示している。

以上、論じてきたように、臨安の「京城」は北宋

開封のそれは違い、都人を防衛する役割を担うためのものではなかった。おそらく、儀礼上の都の城内と郊外の境界線をしめす性格が強かったと思われる。

先述したように、開封では、五代世宗の時、外部に膨れ上がった城外人口（禁軍軍営が中心）を囲繞するために新城が作られている。また、その城壁の堅固さは、天下統一の意思を表すものだったのである。神宗時代の新城修築にも富国強兵の可視化という目的が込められていた。一方、南宋の臨安でも、都人の居住する市街地は城外に広がっていたが、それを囲繞し防衛するための新たな外城壁はもうけられなかった。この違いが、臨安と開封との違いなのである。この違いの背景を巡る背景については次節で検討する。

開封と臨安との同一性を指摘しているのが林昇[60]の絶句（「題臨安邸」）である。

山外青山楼外楼　西湖歌舞幾時休
暖風薫得遊人酔　直把杭州作汴州

この詩について、明末の馮夢竜は、南宋の人々が山水の美しい西湖のほとりの杭州において遊び暮らし中原回復を忘れ、杭州をまるで開封のように見做している、と解釈する[61]。この解釈が現代中国では踏襲されて小学生が学ぶ愛国詩となっている。しかし、馮夢竜の見解は、明末という時代の制約によるとするのが鈴木陽一氏[62]の説である。私もこの方法的な構想に同意する。

臨安の生活文化などは開封のそれを再現したものが多かった。「直把杭州作汴州」とは、文字通り南宋中期の臨安の文化水準が開封盛期のそれに到達したという意識の表明なのであろう。この詩の「汴州」は「高城深池」をめぐらした、要塞都市としての開封を表していない。『清明上河図』にみえる消費都市としての開封を表しているのである。

開封での生活経験をもつ孟元老が杭州で著し公刊したのが『東京夢華録』である[63]。南宋末の『夢粱録』は、巻の七までの部分で『東京夢華録』の引き写しが見られる。周煇（1126 － 98）が表した『清波雑志・別志』には、「今臨安所貨節物、皆用東都遺風[64]」という一節がある。先述の瓦子などに代表される開封の都市文明を臨安社会は受容している面が多いのである[65]。

２、呉越杭州や南唐建康・金中都との比較史

前節において明らかにしたように、開封とちがって、臨安は防衛力を有する外城壁をもたなかった。この理由として、臨安が行在であったからと断ずることはたやすいが、他の都城と比較して論じることで、都城としての性格を論じることも、比較都城史の立場からは興味をそそられる論点である。本節ではとくに臨安の前身である呉越の杭州や南唐の建康など江南列国の都城構造との比較検討も試みたい。

a 、城壁を巡る比較

開封旧城と臨安京城（国城）の共通点はともに前代の城壁を利用した「旧城」であることである[66]。東京開封の旧城は唐代汴州城の城郭であった。行在臨安の国城もやはり北宋の杭州城であり、もともとは隋代の杭州城である。共に唐末五代には藩鎮の会府であったことが共通している。

開封では、「包挙天下」を意識した後周世宗[67]の命令によって、顯徳 3 年（965）外城（新城）が築かれ三重城壁となった。先にも述べたように、新法時代に、新城は根本的に作り直されている。このとき首都城郭を「高城深池」に改造することや、城門に甕城を設置することの是非が新法旧法の立場から議論された。すなわち、『周礼』にもとづき法制改革と土木事業を精力的に実施して、目に見える形で国権を強化しようとする新法党の立場と、『春秋』と「祖宗の制」などを論拠とし、徳治主義を主張する旧法党の議論である。旧法党の士人たちは、城壁というハードウェアではなく、「徳」というソフトウェアで政治を行うべきだと主張する。堅固な城壁を不要なときに築くのは不徳であるという『春秋』の論理によって反対している。例えば『資治通鑑』の編者の一人として知られる范祖禹は、甕城や城壕を京師に設置することへの長文の反対論を発表している[68]。京師の外城に辺城のような防衛設備を施すことは京師にふさわしくないという批判である。計画主義的な『周礼』の理念を重視する新法派と、歴史主義の『春秋』を重視する旧法党とのイデオロギー対立ともいえるような議論が、開封の新城をめぐる問題からは抽出できる[69]。

よく知られているように、南宋政府は、新法主義を否定し、「遵嘉祐、愛元祐」という旧法主義の政治姿勢をとる[70]。このことは、本稿で指摘してきた開封と臨安の外城壁の相違の背景にあったと思われる。

杭州も三重城壁になったことがある。呉越初代国王銭鏐は、唐末（892）、首都杭州の外城郭（羅城）を建設し、その周囲が 70 里（35 ㎞）に及んだという[71]。この時期は唐末の動乱の時代であり、戦乱へ

の備えであったとも考えられるが、都城長安の規模をもしのぐような三重の城郭都市として杭州が再編された背景には、銭鏐自立の意志を看取ることが可能かもしれない[72]。ただし、この 70 里の羅城は五代に入ると杳として資料には現れなくなる。その復元案は諸先学によって提案されている。ただし、現在も考古学的な発見はなく、確定はしていない。計画だけだったのか、それとも崩れ去ってしまったか。いずれにしても、羅城を保持することを断念したわけである。銭鏐が後梁の成立以降方針転換し、五代中原国家の忠実な朝貢国として、その地位を保つ政策を墨守することにしたことと関連するのではないか。銭鏐は、後唐長興３年（932）に 81 歳で病没するが、後継者に対して、中原で王朝交代があっても、従属する姿勢を変えないように遺言している[73]。

南宋は、「紹興の和約」を締結し金の臣下という立場となった。これは呉越国の中原国家に対する立ち位置に比類する。臨安に外城郭が築かれなかったことと、呉越の杭州羅城が失われたことと重なる。盟約の遵守をしめすためには、対抗姿勢を可視的するような羅城を設置することが躊躇されたのかもしれない。

南宋末、元からの攻勢をうけ、1275 年 2 月には、賈似道らが遷都を提案している[74]また、規模は不詳であるが、この年の 10 月には城郭工事を行う計画も記録されている[75]。ただし、翌年一月、元軍が臨安に迫ると、恭帝は城外にて降伏した。臨安の城郭を舞台とした攻防戦は行われなかった。臨安の無血開城は、城郭が整備されなかった都城の性格を示しているといえよう。

b、郊祀のための都城プラン　――　建康と開封と臨安

南宋初期、建康と杭州が、都城（行在）の候補となり論争が行われた。主戦派は建康、金との共存を目指すグループは杭州への駐蹕を主張した。そこには建康と杭州の地政学的な位置の問題があったと考えられている[76]が、本稿ではそれぞれの都城プランなどを検討する事によって、再考してみよう。

六朝の建康は隋によって破壊された。宋代の建康は、南唐によって「建設」された計画都市である[77]。南唐は、後唐が滅亡した年に唐の後継王朝を号して斉から国号を改めている。当時の南唐の国力はおそらく中原国家（後晋・後漢）を凌ぐものがあった。その証拠に後晋・後漢が出来なかった郊祀を、都城江寧府（建康）で行っているのである[78]。しかも、諸国（遼・呉越・後蜀・荊南など）の使節を列席させている。江寧府は中央宮闕型で中軸線街路をもつ南郊儀礼を行う基本プランをもった本格的な都城であった[79]。なお、南唐江寧府の城郭は周囲 25 里と小ぶりではあるが、堅固なものであり、975 年、曹彬率いる北宋遠征軍の猛攻を前に半年にわたって防戦している。南宋に至っても度々修築がくわえられ、堅城ぶりは衰えていなかったようだ[80]。杭州とは対照的な本格的な都城だった。

現在の杭州には呉越王が郊祀をおこなった遺址が、西南郊の天真山の中腹に残されている[81]。郊外に郊壇をもうけるという通常のスタイルを採らず山腹で儀礼をおこなったようだ。中原王朝に臣従する政策を堅持した呉越国は対外的には称帝していないし、中原国家の正朔を奉じていた。ただし、国内では歴代の王は君王として振る舞い、廟号を持っていた。また独自の年号も使っていた。このような郊壇の姿は、呉越国の面従腹背ともいえるような姿勢を物語る。

後周太祖（郭威）の開封は旧城の規模だった。国城（北宋の旧城）の中の東部に太廟、西部に社稷を設置した[82]。郊壇は旧城の南正門薫風門（北宋の朱雀門）の南に設置し郊祀を行ったと思われる。これが歴史上開封で行われた初めての郊祀（南郊親祭）である。このように「周」を国号とする後周は、『周礼』「考工記」に則った都城構造を再現している。

開封に外城が作られると、北宋で外城が国城と見なされるようになり[83]、郊壇は、外城の南門南薫門の外側に設置された。北宋皇帝は、太廟や景霊宮での祭礼を経て、皇帝の大行列（鹵簿）は、都城の中軸線、御街を南下し外城外の郊壇に赴いた。

臨安でも南郊儀礼は、紹興の和議の時、紹興 12 年（1142）に初めて実施することになった。しかし、呉越杭州の「南宮北城」のプランを踏襲したため、大内の北側に、太廟・景霊宮が設定された。南郊壇は、呉越の郊壇に近いところに建設された。皇帝行列が通行する御街は、細長い国城の中を南北に貫くかたちで設定された。この御街は杭州のメインストリートではあるが、皇帝鹵簿の通過を想定した幅をもってはいない。狭く途中で曲がっている。拡幅も行われなかった。したがって、北宋では二万を越えた鹵簿の人数は、南宋では、12000 人となった[84]。臨安の都市空間は、都城祭祀空間として改造されていなかった。そこで、郊祀を行ったので異例の鹵簿行列の進路となった。礼制施設などは、行在であることを示すように、仮設されたり既存の施設が流用された[85]。

このように本格的に南郊儀礼の空間として臨安を

整備せず、行在として仮設にとどめられた。そこには南宋政権のあり方がにじみ出ている。城壁を伝統的な都城に叶う者として整備しなかったこともここにその背景があるのであろう。12 世紀に、やはり在来の城郭（遼南京）を改造して建設された都城が金の中都である。対照的に、中都は本格的な都城としての整備が行われているのである。次に中都と臨安を比較して論じてみよう。

c、中都の建設と臨安

金朝は、靖康の変直後に開封から多くの文献や礼制に関する資料を北方に持ち去っている[86]。天下一統を目指した海陵王は、上京会寧府を破壊し、本格的な都城として中都を建設する。そのとき再度占領した開封の平面図が金人により作成され、そのプランによって中都建設は行われた。金朝は、蔡京らの政治によって再編された徽宗朝の「開封」を占領し、中都はそれをモデルとしたことに留意すべきであろう。

中都大興府は、子城が南西に偏在していた遼南京を南西方向に拡大して中央宮闕型とした。『周礼』に定められた「左祖右社」を備えた正方形の都城となった。端門も一門五道である。中軸線街路も明確である。そして、徽宗時代に数度実施された、天地分祭の郊祀制度を採用している（南郊に円丘を、北郊に方丘をそれぞれ建設）。すなわち中都は、『周礼』の理念をもっとも忠実に反映した都城となったのである。同時代に共存した、南北の両都城（中都と臨安）は、在来の城郭都市を改造した都城であったが、改造のされ方は対照的であった。とくに『周礼』への距離に相違があるという試論を展開したい。

『周礼』は、ユーラシア的多民族国家の形成の時代（例えば北周や武周）にて重視されてきた普遍的な政治制度の経典である[87]。そして王安石は『周礼』を新法政策のイデオロギーとしそれまでの宋朝を作り替えようとした。「周礼国家」として王安石の構

想を表現する論者もいる[88]。

金朝の版圖は、ほぼ漢民族だった南宋領域とは対照的に、多民族社会であった。その多様さを金朝の政治力が結びつけていた。統合するための原理として参照されたのは、宋学の中でも『周礼』に基づく「一君万民」的理念だったと考えられる[89]。それは、都城空間で民族棲み分けをおこない、中程に分断の壁を設けた日字型の上京会寧府から、回字型に城郭が形成された中都への遷都にも現れている。

それに対し南宋では、王安石新学が退けられる[90]。『春秋』に基づく華夷思想が前面に出、新法がめざした「帝国」の再興は後景に退く。したがって、新法の象徴でもあった開封の「高城深池」[91]は復活しなかったのであろう。郊祀も天地合祭の制度にもどり、北郊親祭は廃止された。注（84）に引用の史料にあるように、「元祐の礼」によって実施されたのである。そして、南宋初期の政界・思想界の再編の中で[92]、王安石が重視した『周礼』を見る目が厳しくなる。『周礼』の権威に対する懐疑論（疑経）が盛んとなったのである[93]。このような動きは都城城壁や都城空間（郊祀）をめぐる問題と、同じ背景を持ったものなのではないか。

前節で提起した臨安市街地を防衛する外郭が不在だったという論点を、比較史の視覚から背景を考えてみた。まず、亡命政権である南宋は行在である臨安を完全な都城として整備することをあえてしなかった。その一つとして、城外人口が拡大しても外郭城という防衛設備をもうけなかったことである。一つ提起した論点は、北宋時代の新法旧法の党争と城郭や郊祀の関係からのものである。初期南宋政府は、元祐皇后を奉じて政権の正統性を主張したように、おおむね旧法党の立場に立った。新法の象徴ともいえる巍々たる開封外城の姿を、臨安で再建することは出来なかったのではないか。礼制の面でも、臨安での南郊儀礼が徽宗の政和・宣和時代におこなわれるようになった天地分祭ではなく、それ以前の天地合祭で挙行されることになった。地壇（方丘）も建設されていないようだ。これらの論点は、天下一統をめざした海陵王の中都建設との比較によって深彫りされたのである。

おわりに

後周開封で出現した回字型の三重城壁ではあるが、北宋末には旧城（裏城）はその城壁としての機能はなくなっており、事実上三重城壁から二重城壁となっていた[94]。外城が防衛力を強化される一方で、旧城は後半には修理されず頽圮していた。（したがって、靖康の変で外城が占拠されると、北宋は敗北を認めてしまった。）

一方の臨安は南宋を通じて二重の城郭構造であった。行在の京城（国城）は防衛機能をもたず、大雨により崩壊することも重なった。南宋政権の移駐に伴い、臨安城外には、瓦子、市、軍営、寺観などを中核とする市街地が広がった。ただし、それを防衛するための城郭は造られなかった。

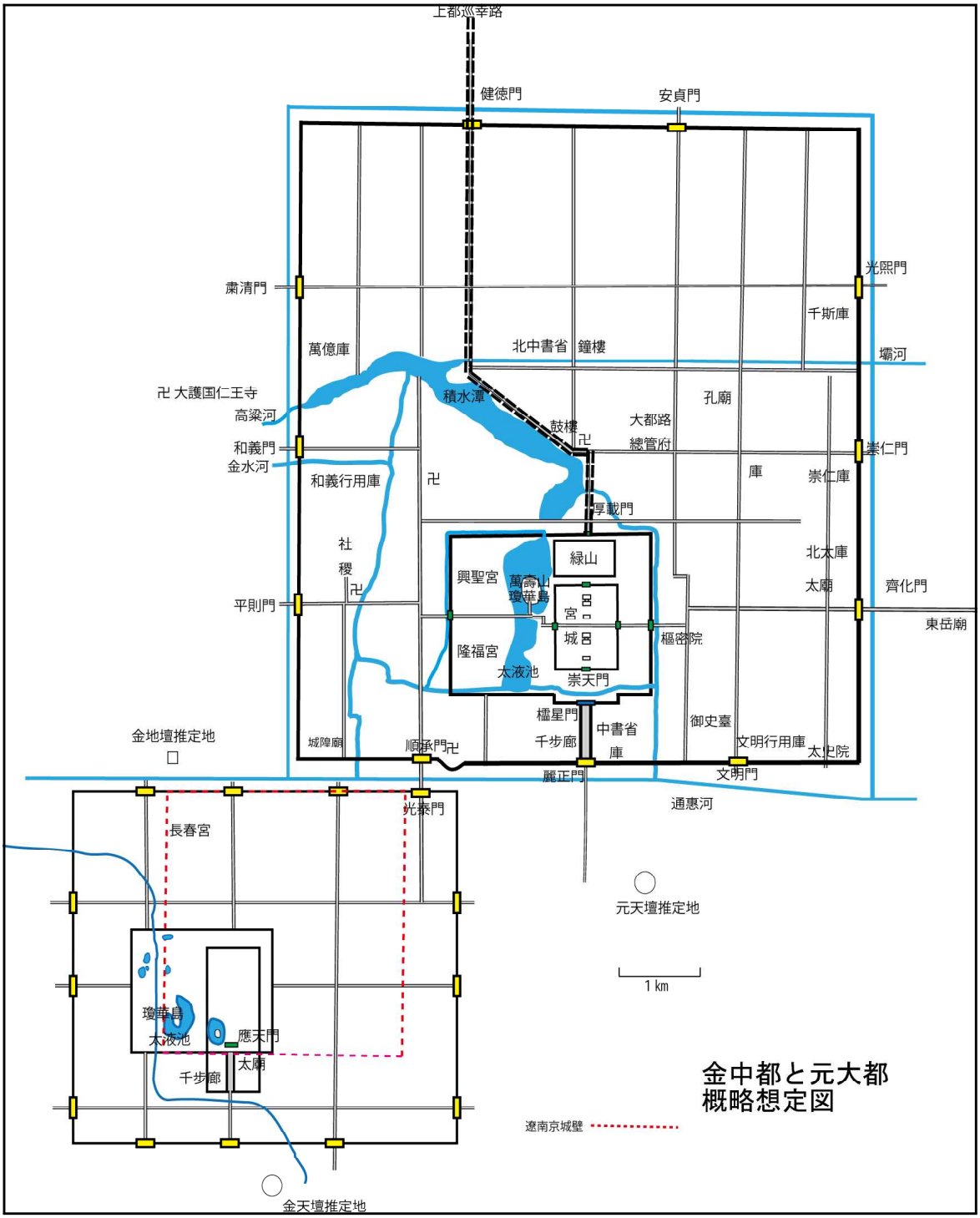
金朝と講和する国策が採られたことで、主戦派が押す建康ではなく、臨安に定都されたことはよく知られている。建康は、南唐の江寧府だった。南唐は、中原国家に対抗する姿勢を保ち、江寧府は、堅固な城郭をもった都城である。一方、臨安は五代中原国家に従属していた呉越の都城であり、城郭も堅固ではない。史料には明確には現れない問題ではあるが、南宋行在の性格に関連する論点ではないだろうか。

開封の旧城空間は『周礼』考工記に準じて、中央の宮殿区画の南に「左に社稷、右に宗廟」が置かれるというものであった。それに対し、臨安では、太廟・社稷と大内、御街の位置関係は、おおよそ計画的に設置されていない。開封の新城壁は後周時代に建造され、更に新法時代に『周礼』を根拠として高度な要塞に生まれ変わったものである。端門（宣徳門）も、蔡京の提案から、『周礼』の「三朝五門」の制に従い、一門五道に改造されている。

一方、臨安の端門（麗正門）は一門三道に止まる。南宋の臨安は、都城プランと城郭の機能、端門の規模などにおいて、『周礼』の規範性への指向が希薄となっているといえよう。これは行在であるという臨安の立場にも起因する。北宋開封（新法期）のもつ『周礼』にもとづくプランや都城空間の象徴性を受け継いだのは、金の中都である。一方、北宋開封で花開いた、瓦市に代表される芸術文化や飲食・芸能などの消費文化を受け継いだのは南宋臨安であった。つまり、北の中都と南の臨安は、同じ開封の後継都城でありながら、開封の異なった側面を継承している。

150 年に及ぶ南宋史は開封への復帰を企図しつつ断念する歴史だった。行在だった臨安の都城化が進んだと考えるのが自然であろう。意識レベルと物理レベルの両面が考えられる。

まず、隆興和議（1165 年）の締結によって前線から帰還した禁軍があふれたこの時期は、瓦市の数が最も多くなった時期でもある。そんな中で、作られたのが、先に紹介した林昇の「直把杭州作汴州」



におわる「題臨安邸」の詩であり、開封の繁盛のレベルに臨安が達したことと、都城としての意識の高まりを表現しているといえるのではないか。孝宗から寧宋朝において、臨安を京師（都城）して取り扱う詩文が多くなったという研究もある[95]。

乾道 9 年（1173 年 ）、これまで大雨の度に崩壊を繰り返していた京城壁が甎石で覆われ、崩壊がとまる。このような大工事が施されたことは、行在ではなく本格的な帝都として臨安を整備することを内外に示すものになったのではないだろうか。

なお、高橋氏が〔2012〕において度々指摘するのが、孝宗時代以降、城内において主人が居なくなった皇族の屋敷などが次々と道観・道宮に改造されていることである。道教への国家的な尊崇が深まったことが背景にあるようだ。それは、道教を国家宗教とする宋朝都城の復活である。

さらに理宗末年からの賈似道の時代である。イメージ戦略に長けていた専権宰相は、美術品の収集家としても高名であるが、蘇堤の改修に係わるなど、西湖の景観への貢献も知られている。1265 年（咸淳元年）ごろに編纂された『咸淳臨安志』は 100 巻に及ぶ膨大な内容を持つ臨安の地方志である。小二田章氏によると、編纂目的は賈似道の政治の成果を都城臨安の繁栄（都城繁華）をしめすことで顕彰することにあったという[96]。

『咸淳臨安志』を思想的な問題として考察する山本健太郎氏の議論は注目される[97]。『周礼』における「地中」は天文観測によって確認する中国の中心＝都邑の場所である。後周以来、開封が「地中」に当たるという観測結果が用いられ、『周礼』の権威により都邑と見なされていた。一方『尚書』では洛邑が周公の建都の歴史により「土中」＝都邑と見なされる。『咸淳臨安志』では、「整序たる群祀」を表現することによって臨安を洛邑に「擬制」し、「土中」という『尚書』における中心性を付与しようとしたという見解である。『周礼』主義ではない都城臨安という本稿の論旨に沿ったものであろう。そして、開封を超えた南宋末期の都城臨安の成立を示す論理として位置づけられるのではないか。

同じ時期、1264 年にアリクブケの乱を鎮圧したクビライ政権は上都・中都両都制を確立したのち、金中都の東北に「大都」（北城）を建設している。あたかも『咸淳臨安志』に示された臨安の繁華に対抗するかのようである。大都には中都を通じて開封から受け継いだ都城空間の要素が設定されている。それは、徽宗時代の開封において展開した『周礼』の礼制によるものである。三朝制にもとづく皇城・宮城、一門五道の端門、そのまえに広がる千歩廊などの景観である。

大元ウルスは占領後、臨安の南郊壇を破壊する[98]。現在に到るまでその遺址は確認されていないほど徹底したものだった[99]。それは、南北に分断した都城史をひとつに統合する事件だったといえよう。ただし大都で郊祀が行われたわけではない。たしかに冬至に大ハーンは大都に駐畢していた。ただし、大都は、モンゴルの立場からは、大ハーンの率いる巨大な遊牧集団（大中軍[100]など）が越冬する場所、冬営地である。モンゴルのシャーマニズムによる祭祀やクリルタイを行う空間は夏営地であり、それは草原に建てられた上都なのである。大都の南側に見える儒教国家の都城としての側面は見せかけに過ぎなかったのである。この大都と上都の問題については別稿を用意したい。

参考文献

吾妻重二 2009 『宋代思想の研究』、関西大学出版部

板倉聖哲 2012 「張択端『清明上河図』（北京故宮博物院）の絵画史位置」伊原弘編『「清明上河図」と徽宗の時代』勉誠出版。

伊原弘 2009 「宋・元代の南京城：宋代建康府復元作業」『比較都市史研究』28(1)

伊原弘（編）2012『「清明上河図」と徽宗の時代』勉誠出版。

内田昌功 2009「北周長安宮の空間構成」『秋大史学』55 号

宇野精一 1949『中国古典学の展開』北隆館、『宇野精一著作集 第 2 巻』明治書院 1986、再録。

川本正知 2010「モンゴル帝国における戦争」『アジア・アフリカ言語文化研究』80

久保田和男 2007『宋代開封の研究』汲古書院

久保田和男 2012「メディアとしての都城空間と張択端《清明上河図》—— 五代北宋における政治文化の変遷のなかで」伊原弘編『「清明上河図」と徽宗の時代』勉誠出版。

久保田和男 2013「開封廃都と臨安定都をめぐって」『近世東アジア比較都城史の諸相』雄山閣。

久保田和男 2014「宋都開封の旧城と旧城空間について」『都市文化研究』16 号

久保田和男 2015「北宋開封における多重城郭制と都市社会の変容」『中国伝統社会への視角』汲古書院

久保田和男 2016「宋代開封における公共空間の形成－宣徳門・御街・御廊－」『宋代史から考える』汲古書院

久保田和男 2017「金朝における上京會寧府から中都大興府への遷都と都城空間の變化」『史滴』39 巻

久保田和男 2019a「「五代十国」と南郊儀礼——中原国家と南方列国における郊祀」『東方学』137 輯

久保田和男 2019b「二度の開封陥落と中心性の移動」『歴史評論』No.830 2019 年 6 月号

小二田章 2013「『咸淳臨安志』の位置－南宋末期杭州の地方史編纂－」『中国－社会と文化』28 号

近藤一成 2009『宋代中国科挙社会の研究』汲古書院

佐川英治 2005「北魏洛陽の形成と空間配置-外郭と中軸線を中心に-」『大阪市立大学東洋史論叢別冊特集号「中国都市の時空世界」』

佐藤サアラ 2009「米内山陶片と南宋官窯」『常磐山文庫中国陶磁研究会 会報 2』

斯波義信 1988『宋代江南経済史の研究』汲古書院
鈴木陽一 2016『白蛇傳』の解読補遺(1)『人文研究』190 神奈川大学人文学会
妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社
妹尾達彦 2009 「コメント２」(『都城制研究（２）奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 vol.23』)
高橋弘臣 2003 「南宋初期の巡幸論」『愛媛大学法文学部論集 人文科学編』第 15 号
高橋弘臣 2005「南宋臨安城外における人口の増大と都市領域の拡大」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第 23 号。
高橋弘臣 2006「南宋臨安の下層民と都市行政」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第 21 号
高橋弘臣 2009「南宋臨安の三衙」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第 26 号
高橋弘臣 2011「南宋の皇帝祭祀と臨安」『東洋史研究』 69 巻 4 号
高橋弘臣 2012「南宋臨安における空間形態とその変遷」『愛媛大学法文学部論集. 人文学科編』第 33 号
豊田裕章 2002「隋唐代における「都城」の概念の変化について－日本の宮都との関係を含めて」『条里制・古代都市研究』第 18 号
中島比 1985「大興城の郭壁」『東洋史苑』第 24・25 合併号
溝口雄二 1987『儒教史』山川出版社
山崎覚士 2010『中国五代国家論』思文閣
山本健太郎 2015「『咸淳臨安志』の思想－洛邑としての臨安」『中国哲学研究』第 28 号

曹家齐2005 「爱元祐与遵嘉祐－－对南宋政治指归的一点考察」『学术研究』2005年第11期
陈瑜 2013 「现实的选择与理想的剪影 —— 南宋词人以临安为中心的帝都书写」『福建江夏学院学报』V01.3 NO.6
丁同俊 2014 「南宋临安瓦肆勾栏研究」『艺术教育』2014 年第 02 期
杜正贤 『南宋都城临安研究-以考古为中心』上海古籍出版社 2016
陸鋻三 1988「城凡三重 縱寛横仄」『呉越首府杭州』浙江人民出版社
邵群 2017 「吴越钱氏郊坛遗址研究」『遗产与保护研究』 2017 年第 3 期
郎旭峰 2015 「南宋临安城城垣若干问题研究」『东方博物』2015年第3期
呉松弟 2005（山崎覚士訳）「南宋における移民と臨安文化の変遷」『大阪市立大学東洋史論叢 別冊特集号』
吴慧 2006『中国度量衡通史』中国计量出版社

注

1)〔久保田 2015〕を参照。
2)〔高橋 2011〕および〔久保田 2014〕を参照。
3)徐松輯『宋会要輯稿』（以下『宋会要』）中華書局 1957、方域 2/18：（紹興 18 年）六月十八日、詔：臨安府於國城之東擇桑塏地建築九宮貴神壇壝。
4)呂不韋『呂氏春秋』巻 6、『叢書集成新編』新文豊出版公司 1985、20 冊 533 頁中：文王曰、不可。夫天之見妖也、以罰有罪也。我必有罪。故天以此罰我也。今故興事動衆、以増國城、是重吾罪也。不可。
5)『宋会要』礼 2/41 に「宋初、因舊制、毎歳冬至圓丘、正月上辛祈穀、孟夏雩祀、季秋大享。凡四祭昊天上帝。親祀則併皇地祇位。作壇於國城之南薫門外。」とある。ように、北宋開封では、南薫門を正南門とする外城（新城）が、「国城」とされた。それは礼制上の位置づけであることがこの史料からわかる。
6)〔豊田 2002〕
7)〔内田 2009〕
8)魏徵等『隋書』巻 7、礼儀志、中華書局 1973、43 頁： 隋制、於国城西北十里亥地、為司中、司命、司禄三壇、同壝。
9)〔中島 1985〕148 頁の論証による。
10)劉昫等『旧唐書』4 巻、高宗紀、永徽 5 年（654）11 月癸酉、中華書局 1975、73 頁には「築京師羅郭、和雇京兆百姓四萬一千人、板築三十日而罷。九門各施觀。」とあり、30 日間で中止されたという。他書には文字の異同があり、別稿で検討してみたい。
11)『旧唐書』巻 8、玄宗本紀、開元 18 年（730）4 月乙卯、中華書局 1975、194 頁には、「築京城外郭城、凡十月而功畢。」とあり、この時に外郭城の工事は、6ヶ月ほどの大工事である。王溥撰『唐会要』巻 86 城郭、上海古籍出版社 1991、1876 頁によると、90 日で「畢」ったという。
12)〔妹尾 2001〕121 頁
13)〔中島 1985〕147-8 頁に長安城における攻防戦が、皇城を挟んだものであることが論じられている。
14)〔佐川 2005〕
15)〔中島 1985〕147-9 頁を参照。
16)後周では、旧城を国城と呼んでいた。薛居正：『旧五代史』巻 142、礼志、中華書局 1976、1904 頁：（広順）三年九月、将有事于南郊、議于東京別建太廟。

時太常禮院言、准洛京廟室一十五間、分為四室。東西各有夾室、四神門、每方屋一間、各三門、戟二四、別有齋宮神廚屋宇。准禮左宗廟右社稷、在國城内。請下所司修奉。從之。

17)〔久保田 2007〕

18)〔久保田 2015〕11 頁を参照。

19)『宋会要』方域 1/1 には、「新城周回四十八里二百三十三歩、周顯德三年、令彰信節度韓通董役興築、國朝以來號曰國城、亦曰外城、又曰羅城」とある。

20)范仲淹 『范文正公集』巻 7、「岳陽楼記」、『范仲淹研究資料彙編』(行政院文化建設委員会 1988) 210 頁:「…居廟堂之高、則憂其民。處江湖之遠、則憂其君。是進亦憂、退亦憂。然則何時而樂耶、其必曰先天下之憂而憂、後天下之樂而樂乎。」

21)王安石『臨川先生文集』巻 12、「收鹽」、中華書局 1971、177 頁:「一民之生重天下、君子忍與爭秋毫。」

22)陳均『九朝編年備要』巻 30、靖康元年 11 月、中華書局 2006、804 頁:梅執禮建議清野。詔河東北、京畿並清野。命執禮為清野使。已而京畿民、扶携入城。

23)『宋会要』方域 2/18、7341 頁(注 3 前掲史料)

24)『宋会要』礼 18/39、752 頁。

25) 周淙『乾道臨安志』巻 2、城社、世界書局 1977、24 頁には、「九域志、隋楊素刱州城、周回三十六里九十歩、有城門十二。」とあり、『元豊九域志』の説を引き、臨安城壁は、隋代の創建に依るものだという。

26)『宋会要』方域 2/17:(紹興 13 年) 八月二十五日、大理寺臣吳鏞言:伏自車駕駐蹕東吳、城壁仍舊、未暇作改。近日創建前殿、肇親典禮。每遇朝會、宰執百(官)、緣朝在城之外。遂自五鼓後、啟外城二門之鑰。不惟蜜爾皇城、而又迫臨江渚、富商大賈風帆海舶往來之冲。豈所謂九重嚴邃、君門萬里之義乎。乞下所屬措置,若城外朝路難以移改,秖於朝路之外東量添城壁,免致未旦啟鑰。

27)『宋会要』方域 2/20:(紹興) 二十八年六月三日、詔皇城東南一帯未有外城,可令臨安府計度工料,候農隙日修築。

28)前掲史料(『宋会要』方域 2/20:「(紹興) 二十八年六月三日、詔」)を参照。その時に、新設された「圍墻大路」に係る利渉門を、雅名にあらため嘉会門とすることになった(『宋会要』方域 2/21、紹興 28 年 (1158) 9 月 22 日の条)。この時点が都城臨安の外形的な完成といえよう。

29)『宋会要』方域 2/21、紹興 28 年 9 月 22 日。(紹興 28 年 9 月) 二十二日,措置修城所言契勘新城添置便門,今欲移用利渉為名,所有舊利渉門係於圖牆大路修蓋,乞別立門名。詔新南門可名嘉會門。

30)『宋会要』方域 2/25:隆興元年十二月十八日,權發遣臨安府陳輝言本府車駕駐蹕之地,其周回禁城因春雨連綿,舊城多圮…

31)潜説友『咸淳臨安志』巻 3「郊廟」、『宋元地方志叢書』大化書局 1978、3898 頁以下。

32)『夢粱錄』巻 7「杭州」、浙江人民出版社 1984、53 頁。

33)宋尺は〔吳慧 2006〕123 頁以下の考証によると、31.2 ㎝であるという。本稿ではこの尺度を用いて、メートル法に換算した。一里は 561 mとなる。

34)『夢粱録』巻 7「杭州」53 頁には「諸城壁各高三丈餘、横闊丈餘。」とある。

35)〔杜正賢 2016〕49 頁

36)『宋会要』方域 2/21:今来、所展城闊一十三丈、内二丈充城基、中間五丈充御路

37)『宋会要』方域 2/20、紹興 28 年 7 月 2 日。

38) 考古調査(〔郎旭峰 2015 〕28 頁)によると、この部分の宋代城壁は内外共に磚で覆われていたとのことである。〔杜正賢 2016〕51 頁も参照。

39)『宋会要』方域 2/25:隆興元年十二月十八日、權発遣臨安府陳輝言、本府車駕駐蹕之地、其周回禁城、因春雨連綿、旧城多圮、自徳寿宮東及錢湖門北至景霊宮寺等、計三百三十五丈、自今年三月二十一日興役、至十月二十七日畢。

40)『宋会要』方域 2/22(乾道 9 年 1173) 十二月二十一日、試尚書兵部侍郎兼知臨安府沈度言、本府車駕駐蹕之地。其周回禁城、昨因今歳梅雨損兌、七十二處、計五百九十五丈。分委官相視、檢計約用甎灰木植物料、工食錢九萬五千餘貫。委官、自徳壽宮東城、修砌周回城壁。一切工畢、詔官吏等第推恩。

41) 『宋会要輯稿』方域 2/24 ～方域 2 /25。

42)〔杜正賢 2016〕51 頁を参照。また〔郎旭峰 2015 〕28 頁にも発掘時に撮影された、煉瓦城壁の貴重な写真が掲載されている。

43)貢師泰「杭州新城碑」『玩齋集』巻 9、文淵閣四庫全書。現在、元明清の磚城の遺構は杭州市古城墻陳列館にて見ることができる。

44)〔高橋 2005〕〔高橋 2012〕を参照。

45)李心伝『建炎以来繫年要録』巻 173、紹興 26 年 7 月丁巳、中華書局 1988、2858 頁には「切見臨安府自累経兵火之後、戸口所存、裁十二三、而西北人以駐蹕之地、輻輳駢集、数倍土着」とある。〔呉松弟 2005〕49 頁によると、北方移民とその後裔は、臨安人口の 3

分の 2 前後に及んだという。

46)〔高橋 2005〕〔高橋 2012〕27 頁以降に城外の市街地化について詳論されている。『淳祐臨安志』巻 10、軍営、『南宋臨安両志』浙江人民出版社 1983、114 頁には「城外居民繁盛、防虞之事、亦豈容略」とあり、防火のための組織が置かれている。また、同書 109 頁では乾道 3 年に城外における専門の治安機関「城東西巡検使が置かれたことがわかる。

47)〔高橋 2006〕123 頁。

48)〔久保田 2007〕第六章　城内の東部と西部

49)『咸淳臨安志』巻 57、兵制。〔高橋 2009〕〔高橋 2012〕27 頁以降を参照。

50)呉自牧『夢粱録』19 巻「瓦舎」、179 頁：紹興間、駐蹕於此。殿岩楊和王、因軍士多西北人、是以城内外剏立瓦舎。招集伎樂、以為軍卒暇日娯戯之地。今貴家子弟郎君、因此蕩遊破壊、尤甚於汴都也。其杭之瓦舎、城内外不下十有七處。

51) 周密『武林旧事』巻 6「瓦市勾欄」浙江人民出版社 1984、93 頁。

52)南宋末期の在京禁軍の減少については、〔高橋 2009〕77 頁を参照。

53)瓦子数についての問題の提起考証は〔丁同俊 2014〕にもあり、戦争が頻繁になった時代なので、軍人の娯楽施設である瓦子の数量が少なくなったとする。

54)『咸淳臨安志』巻 1、7-3880 頁。なお『咸淳臨安志』巻 10 にみえる瓦市の数は、夢粱録と同じく 17 である。

55)周必大『二老堂雑志』巻 4、『叢書集成新編』84 冊 160 頁：臨安土人諺云、『東門菜、西門水、南門柴、北城米』。蓋東門、無絶民居、彌望皆菜圃。

56)周密『武林旧事』巻 6「諸市」浙江人民出版社 1984、92 頁

57)〔斯波 1988〕の研究付図を参照。

58)『淳祐臨安志』巻 10、山川、『南宋臨安両志』浙江人民出版社 1983、197 頁。

59)〔高橋弘臣 2012〕3 頁以降による。

60)『宋詩紀事』巻 56-13a（内閣文庫藏、乾隆 11 年刊本）によると、林昇は「淳熙時士人」という。

61)この詩は明末の馮夢龍編『警世通言』巻 28-1a、「白娘子永鎮雷峰塔」（早稲田大学藏、天啓 4 年序刊本）の冒頭に置かれている。国土回復を忘れて遊楽にふける和平派への風刺としての解釈されている。

62)〔鈴木 2016　102 頁〕

63)〔久保田 2013〕

64)周煇『清波別志』巻中、『叢書集成新編』新文豊出版公司 1985、84 冊 370 頁下。著者は、靖康元年（1127）12 月生。

65)〔呉松弟 2005〕と〔陈瑜 2013〕90 頁を参照。

66)正確には南宋臨安では、東南部、嘉会門付近は南宋になってつくられた「新城」であり、それ以外の部分が「旧城」と呼ばれている。

67)『旧五代史』巻 128、王朴伝、1681 頁：世宗以英武自任、喜言天下事、常憤広明之後、中土日蹙、値累朝多事、尚未克復、慨然有包挙天下之志。

68)〔久保田 2007〕第 9 章　神宗の外城修築をめぐって

69)〔久保田 2007〕第 9 章　神宗の外城修築をめぐって。王安石の『周礼』重視と二程子や朱子の『春秋』重視という経学上の違いについては、〔溝口 1987〕246 頁以下を参照。

70)〔曹家斉 2005〕を参照。

71)『呉越備史』巻 1、『五代史書彙編』杭州出版社 2004、6180-1 頁を引く〔陸鋈三 1988〕26-32 頁によると、890 年に版築をおこない 50 里の城郭とし、さらに、893 年には、70 里に拡大したとする。

72)〔山崎 2010〕第七章　「未完の海上国家－呉越国の試み」によると、銭鏐の時代には、海上の交易圏を支配空間とする独自の国家構想が模索されていたという。「呉越海上国家」と称されるこの構想は、南シナ海・東シナ海の両交易圏の結節点となった両浙地方の海港都市を支配したことを背景としている。例えば、南シナ海交易でもたらされる蘇芳などは、独占的に呉越国が取り扱っており、中原国家への貢献にも用いられていた。また、日本・朝鮮など諸国にも輸出され、相当の国益を挙げていた。また、後百済・高麗・渤海などに呉越国王が封爵を施し、日本政府に対しても国書を送るなど、中国大陸の「そと」である海上交易圏に支配権を及ぼそうとしていたという。

73)『資治通鑑』巻 277、長興 3 年（932）3 月庚戌には、「呉越武肅王錢鏐疾、…曰「子孫善事中國，勿以易姓廢事大之禮。」庚戌卒，年八十一。」とある。

74)脱脱『宋史』巻 47、瀛国公本紀、徳祐元年二月甲子、中華書局 1985、926 頁。

75)『宋史』巻 47、瀛国公本紀、徳祐元年十月丁未、934 頁。

76)〔高橋 2003〕72 頁

77)陸游『南唐書』巻 1、烈祖本紀、天祐 11 年（914）、『五代史料彙編』 杭州出版社 2004、5464 頁には「・・・始城昇州」同一四年五月「城成、（徐）温來觀、喜其制度壯麗・・・」とある。この時、昇州（江寧府）の城郭の「制度」（プラン）が徐知誥によって

定められたのであろう。この城郭は、明清南京城のプランの基礎にもなるものである。

78)『至正金陵新志』巻 1、『宋元地方志叢書』1562 頁：建康旧府城周二十五里四十四歩、上闊二丈五尺、下闊三丈五尺、高十丈五尺、内卧羊城、闊四丈一尺、皆楊呉順義中（921-7）所築也。

79)〔久保田 2019a〕

80)『景定建康志』巻 20、南京出版社 2009、493 頁。特にモンゴルの侵攻が激しくなっていた景定年間に知府として活躍した馬光祖により大規模な修築が行われた。『景定建康志』は、馬光祖が編者である。

81)〔邵群 2017〕によると、この遺址は、2002 年に発掘確認されたもので、残されている石碑によると、後梁龍徳元年（921）に造られたものだという。『咸淳臨安志』巻 29、4165 頁には、「登雲洞、在郊臺天眞院山内。錢武肅王、嘗置登雲臺。」とあり、天壇とは書かれていない。「登雲臺」は、『咸淳臨安志』に付録されている「西湖図」に見える。至近に南宋の円丘があったことが、この図には示されている。板倉聖哲監修『描かれた都』東京大学出版会 25 頁には、東京大学東洋文化研究所に所蔵されている宋版の「西湖図」が所掲されている。

82)『旧五代史』巻 142、礼志、1904 頁（前掲）

83)『宋会要』方域 1 /1　新城…国朝以来、号曰国城、亦曰外城、又曰羅城。

84）李心伝『建炎以来繫年要録』巻 150、紹興 13 年 11 月庚申、中華書局 1988、2415 頁：日南至。合祀天地於圜丘。太祖太宗並配、自天地至從祀諸神凡七百七十有一、設祭器九千二百有五、鹵簿萬二千二百有二十人。…盖元祐禮也。禮官以行在御街狹故、自宮徂廟、不乘輅、權以輦代之。禮畢上不御樓。内降制書、赦天下。

85)〔久保田 2013〕125 頁を参照。

86)宋人『靖康要録』巻 15、『叢書集成新編』新文豊出版公司 1986、靖康 2 年正月 26 日、116 冊 780 頁に、金が持ち去ったもののリストがあるが、その中に、「皇城宮闕図」「四京図」が見える。

87)〔妹尾 2009〕99 頁の『周礼』についての言及を参照。

88)〔吾妻 2009〕第 2 章「王安石『周官新義』の考察」101 頁には、王安石が鄭玄と同じく「周礼国家」を構想したという指摘がある。

89)〔久保田 2017〕13 頁

90)〔溝口 1987〕を参照。無論、程朱学は、秦檜など和平派の政権から度々弾圧を受けている。

91)〔久保田 2007〕265 頁など。

92)〔近藤 2009〕第 5 章「南宋初期の王安石評価について」

93)〔宇野 1949〕第 4 章「宋元明に於ける論争」、第８章「『周礼』の成立とその後世に及ぼせる影響」321-323 頁　吾妻前掲書　第 2 章「王安石『周官新義』の考察」

94)〔久保田 2014〕

95)〔陈瑜 2013〕89 頁を参照。

96)〔小二田 2013〕127 頁。

97)〔山本 2015〕

98)『元史』巻 13、世祖紀、中華書局 1976、271 頁：（至元二十二年春正月）庚辰…毀宋郊天臺。桑哥言：「楊輦真加云、會稽有泰寧寺、宋毀之以建寧宗等攢宮。錢塘有龍華寺、宋毀之以為南郊。

99)〔邵群 2017〕の結束語を参照。『武林旧事』巻 5、72 頁によると、南宋の郊台は「錢王郊台」に近いところにあったという。『咸淳臨安志』の皇城図では、「南宋郊台」の至近に登雲洞とある。同書巻 29、4165 頁には、「登雲洞、在郊台天真院山内。錢武肅王、嘗置登雲台」とある。すなわち登雲洞は登雲台であり、錢王郊壇なのである。なお南宋郊壇下官窯の遺址は発見され公開されている（〔佐藤 2009〕を参照）。

100)「大中軍」については、〔川本 2010〕125 頁を参照。